



がくじ



摂南大学図書館報

No. 44

1996. 1

学而時習之、不亦説乎。（「論語」より）

—学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや—

*題字は王羲之の書による

集印帳と芭蕉の旅

学長

さ や と やすよし
佐谷戸 安好

私が専門書以外に好んで読む機会の多いものは、歴史や伝記などである。特に古代史に関連したものを好み、私はそこに登場してくる古い寺院等を訪ね、素晴らしい建築や仏像と出会うことを喜びとしている。

私が寺院の巡歴を始めたのは、昭和30年頃からで、友人の勧めで法隆寺に参詣の折に初めて集印帳を買って求めた。その一頁には添え書もなく「法隆寺」の寺印だけが押されている。勤務地が水戸、東京、大阪と代るにつれて、訪ねる寺院の場所も広がり、その数も多くなってきた。もう4冊目になった集印帳も余白の残りが少なくなっている。

初めて法隆寺で買って求めた集印帳の中に、皇宮山蛭満寺の寺印に、秋田県象潟、昭和48年8月22日と添え書してある。私は当時高校と中学に進んだ娘をつれて、芭蕉が曾良をともなって旅した「おくのほそ道」の歌枕（名所）を旅行することとした。その前年に松島、平泉、中尊寺、立石寺を訪ねた。そしてこの28年には芭蕉の旅とは逆のコースをとり、酒田、鳥海山を経て象潟への旅であった。

蛭満寺は別に干満珠寺あるいは象潟寺ともいい、阿弥陀如来を本尊とする真言宗の寺院である。その寺号の由来は、神宮皇后が三韓から干満両珠を携えて帰国したとの故事にもとづくものともいわれている。境内には樹齢

千年にも達するタブの巨木を始め、歴史を感じさせる鬱蒼とした樹木が参道の両側にそそり立っている。参道の向うには品よくそして堂々として身がまえているような山門が印象的であった。芭蕉が旅した当時の象潟は、松島にも似た小島が浮ぶ入江であった。そして彼等はここに舟を浮べて遊んだといわれる。寺の方丈に座って入江をながめた芭蕉は、その景色について、

「おもかげは松島に通いてまた異なり、松島は笑うがごとく、象潟は憾むがごとし。寂しさに悲しみを加えて地勢魂をなやますに似たり」の一文を加えた。そして

“象潟や雨に西施が含飲の花”

の一句を詠んだ。これ程芭蕉に激賞された象潟も、二人が北陸路に向けて出立してから115年後、文化元年（1804）の大地震で海底が隆起し、地勢が一変して陸地になってしまった。そして私共が訪ねた象潟の海は入江に点在していた九十九島の景勝はなく、いまは水田の中に大小60余りのぼっかりとした小山となって残っているだけである。

その後私共家族の奥の細道紀行も娘達の進学で同行できなくなった。そのため家内と時々東北、北陸路をドライブし、芭蕉のたどった歌枕を訪ね終えたのは、その後5～6年たったからである。

としがみミニレクチャー〈第28回〉

異文化交流論

経営情報学部経営環境情報学科 教授

かみの けいいちろう
神野 慧一郎

ドイツの哲学者カントは、スコットランドの思想家ヒュームの本を読んで独断の眠りを覚まされたと言って感謝したが、文化交流はいつもそんな平和な形で行われたわけではない。歴史的に見て、文化の交流を引き起こしたのは、多くの場合、戦争と交易であった。戦争を契機として、文化の大きな流れが生じた例としては、古くは、アレキサンダー大王による遠征がある。これは、ギリシア文明をインドへもたらし、それはめぐり来たってわが国にまで達している。もう少し新しい例をとれば、十字軍運動がある。十字軍運動は、結果として、アラビアの文化を西欧にもたらすこととなった。これはまた、アラビア経由で古代ギリシアの文化、すなわちアリストテレスの思想を、西欧に逆輸入する結果ともなった。そして、これは更にトマス・アクイナスがキリスト教に論理的な骨格を与えるという結果を生み、その後の西欧の思想に大きな影響を残した。

過去において文化交流は戦争によることが多かったという事実を述べたのは、今後もそうだ、と言うためではない。文化の交流という言葉の甘さに酔うのは危険であることに、注意を喚起したまでである。親子、兄弟、夫婦もまた、喧嘩を通じて理解し合うようになることがしばしばである。文化というものとはひとつの社会における人々の生きざまの根底をなすものであるからには、いつも穏やかに別の社会に伝わるというわけにはいかない。異文化の急激な流入は、多かれ少なかれ異常状態を生むのである。そもそも他国の文化が理解可能かどうか、本来はまず問うてみるべきであろう。しかし、ここではその議論はしないでおく。

わが国の近代化も、地球規模で動いた文化潮流に洗われた結果である。それは世界的なスケールでの交易の拡大の結果だ、と言ってもよい。ただ、わが国の場合、文化に関してはこれまで、いささか輸入超過であり、皆無とは言わないがあまり輸出がないので、交流という言葉を、これまでの経過について言うには無理がある。日本がこれまで輸入した文化のうちで大きなものは、仏教、儒教、西欧の近代的精神の三つであるが、ここでは近代化に話を絞り、明治における西欧文化の輸入だけを取り上げる。

ペリーが四隻の軍艦を率いて浦賀にやって来た時の日本人の驚きは、実に何とも筆舌に尽くせないものであったようである。たちまち日本人たちは、「太平の眠りを破る（蒸気船）上喜撰、たった四杯で夜も眠れぬ」状態に陥った。大多数の日本人にとって、これは突然目の前に開けた国際環境であり、その刺激を文字通り痛感して、二百年の太平の夢は一度に破れたのである。この事態の前面は、通商交易であったが、背後には外国の武力があった。尊皇攘夷と開国左幕の嵐の中で明治政府が成立した過程には、今、立ち入ることはできない。押し寄せた西欧の文明を、われわれの先祖がどのように取り入れたか、その一端を覗くだけにしておこう。

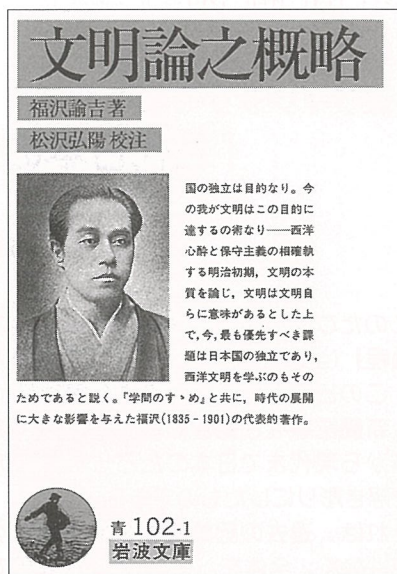
長崎においてわずかにオランダと通商していた以外、長きに亘って西欧の文物に対し窓を閉ざしていたわが国に、どのように西欧の文化を取り入れるべきか。この問題に対し、当時の識者たちが侃々諤々^{かんかんかくかく}の意見を闘わしたことは想像に難くないが、その中で特に注目すべきは福沢諭吉である。彼の『文明論之概略』をひもといてみよう。

彼は、議論をするにはまず本位を定めねばならない、と言う。議論する立場と問題意識とをはっきりさせよというのである。本位を定めて議論しないなら、議論は、末節に終始したり、かみ合わなかったりする。そういう議論をしても意味がない。

福沢は、わが国がその独立を失うことを恐れた。これは、当時の欧米のあり方を見れば当然のことである。阿片戦争は福沢にとっては、つい先頃のことであった。わが国の取るべき方針は明らかである、と彼には思えた。わが国を欧米諸国に比肩しう文明国にせねばならない。そして、これを目指して議論の本位を定めるべきである、と彼は考える。もちろん彼は、欧米諸国に欠陥がない、と言うのではない。欧米諸国にも、戦争はあり、泥棒はおり、権力争いは絶え間がない、と彼は指摘する。しかし、欧米諸国の文明が満足すべきものではないということは、それを捨てるべきだということにはならない。なぜなら、福沢が論じている時点において、他に取るべきものが存在しないからである。

ここまでの論点はただ欧化主義に過ぎないではないか、と言われよう。それは、当時としてはやむを得ない議論であったとしても、今ではもう役に立たないと、思われるかもしれない。しかし福沢の卓見のひとつは、この後にすぐ出てくる。「文明には、外にあらわるる事物と、内に存する精神と二様の区別あり。外の文明はこれをとるに易く、内の精神はこれを求めるに難し。国の文明を謀るには、その難を先にして易を後にし、難きものを得るの度に從いてよくその深淺を測り、乃ちこれに易しきものを施して正しくその深淺の度に適せしめざるべからず」と。「易しいもの」、「外的なもの」と福沢が言うのは、衣服、飲食、機械、住居、政令、法律などである。文明の精神とはなにか。福沢は、これを人民の気風、国論などと表現しているが、要するに国民の知性のことである。

文明を求めるに当たって、福沢は、その形を先にするのを不可とした。順序を間違えると、それは用をなさないばかりでなく、かえって害をなすことが多く、いずれ壁に



岩波文庫版「文明論之概略」

080 I 文庫本コーナー

突き当たると言うのが、彼の意見である。しかし、その後の日本は、彼がいけないと言った形で文明開化の道を進んだ。そして、欧米人の考えを本当はよくわかっていないのに、わかったと思う日本人たちが今日、世にあふれている。おそらくそのような人々も、日頃、一万円札で福沢の顔を見ているはずだが、福沢の言ったことは知らないであろう。

ここに福沢の意見を述べている間、私の念頭にあったのは、十八世紀のスコットランド啓蒙のことである。かの国は、十八世紀の初めに、イングランドと合邦した。しかし、今でもスコットランドは、イングランドとは違うのだ、という意識を持ち続けている国である。そして、この意識の根源をなすものこそが、スコットランド啓蒙を生み、ヒュームやアダム・スミスのような、世界に誇れる思想的な偉人を生んだ。これらは、迫り来るイングランドの政治、経済、文化の圧迫と伝統的なスコットランド文化とのはざまにあって、両者を確と受け止め、自らの文明の精神はいかなるものであるべきかを追求したところから生まれてきた成果である。それは、わが国の異文化受容のありかたと著しい対照をなしている。

資料紹介

映像ライブラリー

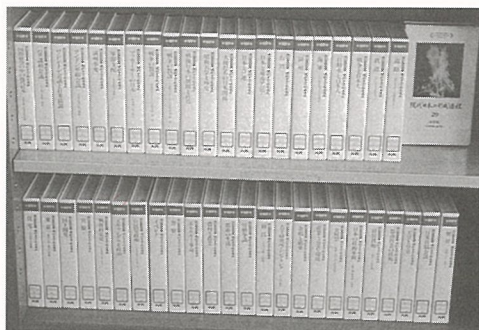
「現代日本の形成過程」

法学部 講師 かわら まさみ
河原 匡見

このたび、本学図書館に『現代日本の形成過程』(全52巻)というビデオ教材が入った。このビデオは、実録の未公開映像や写真、新聞記事など豊富に取り入れて、明治維新から現代まで日本のたどった発展の歴史を浮き彫りにしたものである。

それは、過去の記録映像を単に羅列するのではなく、全体を、(1) 決定的瞬間でたどる政策過程、(2) 近代日本が遭遇した国際関係、(3) 我々の創った社会資本・都市・制度、(4) 産業化の現在(戦前の到達と戦後の成熟)、という4つのテーマにそれぞれ13巻ずつに分けている。具体的な内容については、直接諸君の目で確かめていただくこととして、ここでは、このビデオ教材を積極的に活用することを薦める理由を、次の2点から指摘したい。

第1に、より一層の教養知識の向上に役立つということである。高校までの歴史教育では、どうしても、授業の時間的制約から近現代史が手薄になっており、そのために、現在大学生の近現代史に関する知識不足に対する強い懸念の声が聞かれている。「今」に直接つながる歴史的事実についての基本的知識が不足していることは、個人的レベルで言えば、今後社会人として活躍していく上で大きなハンデであり、また社会的レベルで言えば、世代間の認識ギャップの原因となっている。この知識の不足を補うために、このシリーズ全編を是非一度見ていただきたい。なお、このシリーズは、この種の教材によくみられるような、政治だけとか経済だけとか単一分野を扱ったものではなく、現在の日本がどのように形成されてきたのかを、幅広く総合的に描き出そうとしているので、教養としての知識を身につける上で最適である。



第2に、大学の講義、特に歴史や社会科学関連の科目を受ける上で、より理解度を深めるために活用することができる点である。生まれる以前の過去の問題や現象については、どうしても“リアリティ”を感じられず、そのために理解しにくく感じる場合が多々ある。しかも、同時に私たちはともすれば、それは仕方ないこととしてそのままにしてしまったり、あるいは、むしろそうした距離感、疎外感を客観的な見方と錯覚してしまっている場合がある。しかし、物事を客観的にみることは、あくまでも観察対象に対する緊密な理解を前提とするので、こうした映像資料はその時代の雰囲気や少しでも感じ取って、理解を妨げている“リアリティ”の欠如を補うという意味で大変有用なのである。

このビデオ教材は、各テーマごとに担当の研究者がわかりやすい解説を加えており、それはまさに1回30分という手軽さで受けられるビデオによる講義と言ってもよい。映像もそしてその構成もしっかりとしているので、是非少しずつでも良いから視聴して、私たちの社会がたどった歴史の軌跡とその息吹を感じ取ってもらいたい。そして、「今」だけでなく、これからの時代を見る眼を養ってもらいたい。

翻訳 ホンヤク 本厄?

国際言語文化学部 教授 ^{あんど}安藤 ^{てつゆき}哲行

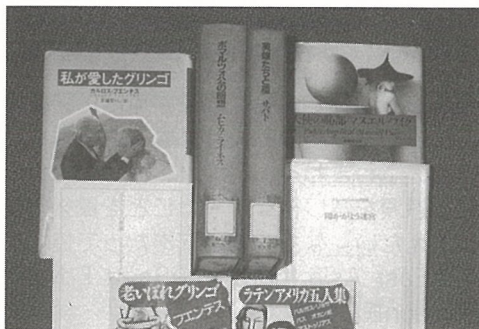


ボルヘスやアストゥリアスといった作家が単発的に紹介されていたラテンアメリカ文学を最初にまとめた形で日本に翻訳紹介したのは70年代後半の国書刊行会の「ラテンアメリカ文学叢書」だった。その後、集英社が長編を中心に「ラテンアメリカの文学」全18巻の選集を組んだ。この選集は83年6月に配本開始したが前年のガルシア＝マルケスのノーベル文学賞受賞が追い風となってわが国でも評判になった。筆者にとってもこの選集刊行中の2年間ははにかんと思ひ出深い。

まず、恩師のはからいで共訳のはずだったサバトの『英雄たちと墓』を結局、全部訳したこと。83年11月に同書は出たが、おかげで、翻訳の文化的意義を重く見たアルゼンチン大使が自国の文学作品の訳者たちを大使館に招いて感謝する、その宴に招かれた。ところが、その傑作を訳しおえてホッとし、のんびりしていたのはここまで。以後、配本予定日との兼ね合いから他の訳者の応援に駆り出されることになった。5分の1ほどを訳し翌年4月に出たフエンテスの『脱皮』。そしていまなお鮮明に思い出すのは12月のムヒカ＝ライネス『ボマルツォ公の回想』。それまで読んだことのない原文600ページの大長編の半分以上を頼まれたのが6

月、締切りは10月半ば。まあ、いいかと気安く引き受けたものの、7月は初めての海外研修の引率で一行も訳せず、メキシコから帰ってからの3カ月がまさしく地獄の日々となった。机・テーブルのある場所では前に大学ノート、横に原著のコピーと辞書といった恰好で作業をし、電車の中では訳した部分のチェック。もちろん当時はワープロなどという便利なものはなく、自分で原稿用紙に写す暇もなかったため、真っ赤になったノートを家人が清書。締切り日前日には東京から編集者が拙宅に来て泊まり込み、翌朝、ようやく訳了すると、編集者は原稿の束を手印所へ直行。そのときは充実感、解放感といったものはなく、ただ、終わった、と思っただけだった。この翻訳作業で乱視になり、いまでさえ、よくあんなことができた和我ながら感心するが、締切に間に合ったのは丁寧に清書してくれた家人のおかげ、そして、原作の面白さのおかげでもある。『ボマルツォ公の回想』は澁澤龍彦が日本に紹介した、イタリアはルネッサンス期にボマルツォの怪物の森を創ったオルシーニ公の一生を描いたもの。物語としてじつに巧く仕上がっており、長いからこそいっそう読書の楽しさを満喫させてくれる。ただ、後半の拙訳は前半の土岐先生の訳のような風格がない。

翻訳するたび日本語の難しさ、自分の語彙不足を痛感する。翻訳しながら直し、ゲラとなって出てくるとまた直す。これで完璧と思えるような訳はできたためしがなく、版が変わればまた直す。原因は翻訳に対する考え方の変化、もっと大きいのは日本語に対する感覚のズレ。まさに翻訳とは本当に厄介なもの。



ワシントン大学図書館

国際言語文化学部 助教授 ^{みかわ}美川 ^{けい}圭

ワシントン大学は、アメリカ合衆国北西部のシアトル市にあるワシントン州立の名門総合大学である。国際言語文化学部の学生夏期海外研修の引率教員として同行した際に、その充実した図書館を利用する機会をえたので、その一端を紹介したい。

広大なキャンパスの中心に位置する、大学のシンボルとでもいうべき建造物が、Suzzallo Libraryである。外観は写真のごとくステンドグラスの美しい建物であるが、それにモダンなAllen Libraryが接続して、あわせて大学のメインライブラリとなっている。向かいには学部学生用のOdegaard Undergraduate Libraryがあり、その他に19にもおよぶ専門別の図書館がキャンパス内の建物に点在している。全蔵書数500万冊、そのうち日本語の書籍が50万冊もあるという。全蔵書で日本のトップレベルの東大・京大の蔵書数にほぼ匹敵し、日本語の書籍でさえも日本の地方国公立大学や私大ではこれにおよばないところが多いであろう。



ワシントン大学のシンボルとでもいうべき、Suzzallo Library。ステンドグラスが美しい。

これらの図書館を利用する際に特筆すべきは、学外者の入館が自由であるところである。何らの閲覧証の発行さえなしに、開館時間内であればまさに「ふらっと」図書館に入っていける自由さは、日本の大規模な大学の不自由さを知る者には信じがたい。原則としてすべてが開架式なので、図書館員の出納を経ずして閲覧ができ、英語に不安がある外国人にとっても理想的な環境にある。そのかわり、すべての書籍に電子チェック装置があり、許可なく館外に持ち出すことはできない。

図書検索用のコンピュータはほんとうに利用しやすく、外国人の私でさえも、検索にほとんどストレスを感じるころがなかった。ただし、蔵書数が膨大であるため、すべての情報が電子化されるにいたっておらず、従来のカードも併用しなければならない場合もある。なお、いくつかのコンピュータには、インターネットに接続できるものがあり、合衆国はおろか、海外の研究機関の情報さえも取り出すことが容易であった。

注目すべきは、その所蔵図書の質の高さである。高い専門的見識をもった図書館司書が分野ごとにいるため、蔵書の質にくるいがいい。私の専門の日本中世史関係でも、おもわず海外にいることを忘れるほどで、手ぶらで訪れても論文執筆が可能。図書館としての充実度の印象は単なる蔵書数をはるかにうまわる。この図書館との出会いに、感涙を禁じ得なかったことを最後に申し添えたい。なお、執筆にあたって協力をえたEast Asia LibraryのScott Edward Harrison氏に感謝する。

利用者の声

私にとって図書館とは必要にせまられて行く場所です。幸か不幸か、レポート提出等の多い研究室に所属しているので、結果として図書館の利用術も上手に(?) になりました。コンピュータ端末で蔵書が検索できるのは大変便利で、例えば、開架されている以外(教授室、書庫他)の本を見つけることができるのは時間と手間が省けていいです。

また、上述した方法で検索し、自分の欲する本が本学に所蔵されていない場合は、その本の購入を希望することができる希望図書購入制度もあるので皆さんも機会があれば利用してみてもどうでしょう。分野によっては時の流れとともに陳腐化してしまっている本もあるようですから。

さて、私の大学生活4年間の図書館利用変遷といえ、とても平凡なので大多数の学生に当てはまると思います。1年次から2年次

の頃は時間潰しを兼ねて5階にあるスポーツ新聞で野球関連の情報収集というのが主でした。ところが、これが



わりと人気が高くなかなか本来ある場所にな
いのです。今でもそうではないでしょうか。雑誌に関しても同様で最新版を読

必要にせまられて

経営情報学部経営情報学科4年

ほそやまこと
細谷 真

めるのは、皆が講義に出て比較的図書館がしている間くらいでしょうか。こういう時は回想を含めてバックナンバーで我慢するのも一案です。

3年次以降は前述のとおりで勉強一本(?)での利用となったのですが、皆さんも卒論の時期に初めて利用することのないよう、時々立寄ってみて下さい。図書館を利用して損はないと思います。

私は毎年、学園祭が終わるとアルバイト漬けの日々を送っていました。文化会本部を引退した時、自分の学生生活について考えた結果、卒業までに以前から興味を持っていた英語をもう一度学ぼうという事で、視聴覚室へ通い出しました。

語学を学ぶ為に、テキストを買って独学にし、しんどり、週に1・2度、英会

話教室に通っていましたが、上達は難しく、費用が高くなりました。そこで私は、目標として、2ヶ月先にロンドンへ行く事にし、最初にNHKの英会話のビデオを、そして、「英語カセット文庫」のテープを定期的に聴き続けました。最初から英字新聞を読むより、自然な形で英語に入れたのは、勉強嫌いの私にとっては、大変良かったと

思っています。

私はこの1月に、又、TOEICを受けようと思っていますが、

2ヶ月先、3ヶ月先の資格試験までの勉強でもつらいと思う時が来ると思います。そ



んな時は、同じ視聴覚室で弁理士や司法書士、中小企業診断士等を目指してが

私と図書館

法学部4年

ただりつこ
多田 律子

んばっている友達を見ると、つらさもふつとんで、やる気が出てきます。資格取得の為、図書館や視聴覚室に通っている方は、是非、同じように勉強している方に話しかけて、サークルを作ってみてはいかがでしょう。

みなさんも、自分なりに利用方法を工夫してどんどん活用してみてください。

軽雑誌購入希望アンケート実施

本館参考図書室（5F）に配架している軽雑誌の購入見直しを行うため、利用者を対象とする『軽雑誌購入希望アンケート』調査を昨年10月に実施しました。

図書館ではこのアンケート調査の実施結果をふまえ、利用が少ない雑誌の購入を中止し、購入希望の多かった雑誌に変更するなどの検討作業を行っています。



⑨アサヒグラフ

⑨オートパイ

[利用の多い軽雑誌ベスト10]

- ①ザ・テレビジョン
- ②スクリーン
- ③週刊ベースボール
- ④Sports Graphic Number
- ⑤スポーツアイ
- ⑥Newton
- ⑦Lマガジン
- ⑧AERA

[新規購入希望ベスト3]

- ①Kansai Walker
- ②ぴあ
- ③週刊朝日
- ③NONNO

新着レーザーディスク紹介

本館視聴覚室（4F）に新しくレーザーディスクを購入しました。館内の再生機器で視聴することができます。今回購入したのは洋画18本・邦画15本で、主に1980年以降に製作された名作ばかりを集めています。レーザーディスクならではの高画質の映像で名画をお楽しみください。

購入したレーザーディスクは、つぎのとおりです。

[洋画]

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| アマティウス (1984年) | 嵐が丘 (1992年) |
| 生きてこそ (1993年) | イマジン ジョン・レノン (1988年) |
| ガンジー (1982年) | ニュー・シネマ・パラダイス (1989年) |
| ハック・トゥ・ザ・フューチャー (1985年) | |
| ハック・トゥ・ザ・フューチャー PART2 (1989年) | |
| ハック・トゥ・ザ・フューチャー PART3 (1990年) | |

- | | |
|---------------------|----------------|
| 薔薇の名前 (1986年) | 普通の人々 (1980年) |
| プラトーン (1986年) | 許されざる者 (1992年) |
| ラスト・オブ・モヒカン (1993年) | |
| ロッキー (1976年) | ロッキー2 (1979年) |
| ロッキー3 (1982年) | ロッキー5 (1990年) |

[邦画]

- | | |
|----------------|---------------------|
| お葬式 (1984年) | おろしや国酔夢譚 (1992年) |
| 蒲田行進曲 (1982年) | 青春デンデケデケデケ (1992年) |
| 幕末純情伝 (1991年) | はるか ノスタルジー (1992年) |
| 病院へ行こう (1990年) | ビルマの竖琴 (1985年) |
| ふたり (1991年) | 僕らはみんな生きている (1992年) |
| まあだだよ (1993年) | マルサの女2 (1989年) |
| ミンボーの女 (1992年) | 満月 (1991年) |
| 息子 (1991年) | |

編集後記

- 「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」の書き出しではじまる芭蕉の「おくのほそ道」。冒頭が有名なわりに通読した人は少ないのではないのでしょうか。岩波文庫の他何冊か所蔵していますので、一度通読してみたいかがでしょう。
- 阪神大震災やオウム真理教関係の事件など昨年は暗い出来事の多い年でした。今年は良い年であってほしいと願わずにはおれません。
- 今号にご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

摂南大学図書館報「学術」No.44 1996.1

編集・発行	摂南大学図書館	本館	〒572	大阪府寝屋川市池田中町17-8	TEL. (0720) 39-9112
		枚方分館	〒573-01	大阪府枚方市長尾峠町45-1	TEL. (0720) 66-3102
印刷	(株)関西廣済堂		〒560	大阪府豊中市蛍池西町2-2-1	TEL. (06) 855-1100